

平成18年度（第50回）
岩手県教育研究発表会発表資料

保育/幼稚園教育

幼小連携のカリキュラム作りに関する研究 －発達段階に応じた子どもの学びを軸として－

研究協力校

盛岡市立米内幼稚園
盛岡市立米内小学校

研究協力員

花巻市立花巻幼稚園 上席主査（幼稚園教諭）
高木宏子
花巻市立花巻小学校 教諭 久保田葉子

平成19年1月9日
岩手県立総合教育センター
教科領域教育室
佐々木恵理子

《 目 次 》

I	研究目的	1
II	研究の方向性	1
III	研究内容と方法	1
IV	研究結果の分析と考察	1
1	幼小連携のカリキュラム作りに関する基本的な考え方	1
(1)	幼小連携を図る意義	1
(2)	幼小連携のカリキュラム作りの考え方	2
(3)	幼小連携のカリキュラム作りについての基本構想図	5
2	発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム試案	7
(1)	年長児後半におけるカリキュラムの留意点	7
(2)	一年生一学期におけるカリキュラムの留意点	7
(3)	交流活動における留意点	7
3	試案に基づく実践例	9
4	発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム作成	15
5	幼小連携のカリキュラム作りに関する研究のまとめ	16
(1)	成果	16
(2)	課題	16
V	研究のまとめ	16
1	研究の成果	16
2	今後の課題	17

おわりに

【引用文献】

【参考文献】

I 研究目的

学校教育においては、かけがえのない幼児、児童一人一人にゆきとどいた教育を行うために、基礎的・基本的な内容の徹底、基本的な生活習慣の確立及び徳性の涵養を重視する教育を推進しなければならない。また、幼稚園教育要領並びに学習指導要領の趣旨を踏まえた指導の継続性と一貫性を強め、幼稚園と小学校が連携を密にして、教育の効果を高める指導を充実させなければならない。このため、幼児児童の心身の発達段階や特性を十分考慮した、適切な教育課程を編成することが大切である。

しかし、中央教育審議会初等中等教育分科会議事録によると、「幼稚園と小学校の連携の不足が、いわゆる『小1プロブレム』と呼ばれるような小学校低学年での問題を解消できない要因の一つとなっている」という指摘や、「教員自身の自ら所属する学校種への帰属意識が強すぎ、他の学校種との交流が少なかったり、学校間での十分な情報交換が行われなかったりという状況がみられる。そのため、前の学校での状況を踏まえて新しい学校に適応させていくための指導が不十分である」という指摘がされている。この指摘は、幼児期から児童期に移行する際、子どもの「発達や学び」「生活」は連続しているにもかかわらず、幼児期の教育と小学校以降の教育との間に必要以上の段差や相互理解の不足が見られる現状にあるということを示すものである。

このような状況を改善するためには、幼児期から児童期までの発達段階に応じた子どもの学びの姿を明確にする必要がある。そして、幼稚園教育要領に示される5領域の再編と新しい活動単元の構築、保育内容と指導内容のなめらかな接続を考慮した教科等の再構成といった視点から、それぞれの教育課程を見直し、幼稚園での協同的な学びと小学校での生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動を接続する具体的なカリキュラムを作成する必要がある。

そこで、この研究は、発達段階に応じた子どもの学びを軸とするカリキュラムを作成し、幼稚園教育と小学校教育の連携に役立てようとするものである。

II 研究の方向性

幼小連携の推進に資するため、なめらかな接続を考慮し、子どもの発達段階に応じた学びを軸とするカリキュラムを作成し提示することとする。

III 研究内容与方法

1 研究内容与方法

- (1) 幼小連携のカリキュラム作りに関する基本的な考え方の検討（文献法）
- (2) 幼小連携のカリキュラム試案作成（文献法・記録法）
- (3) 実践例の収集（保育実践・授業実践）
- (4) 幼小連携のカリキュラムの作成

2 研究協力園及び研究協力校

盛岡市立米内幼稚園及び盛岡市立米内小学校

IV 研究結果の分析と考察

1 幼小連携のカリキュラム作りに関する基本的な考え方

- (1) 幼小連携を図る意義

中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」では、幼稚園と小学校の連

携・接続の在り方についての検討の必要性が述べられ、初等中等教育から高等教育までのそれぞれの役割や連携・接続の課題を指摘している。この中で、幼稚園と小学校が連携し、幼稚園における主体的な遊びを中心とした総合的な指導から、小学校における各教科等の指導への移行を円滑にすることを「なめらかな接続」という言葉で示し、双方の教育に対する相互理解を図って連携を進めることを求めている。

幼稚園教育においては、幼児の欲求や自発性、好奇心などを重視した遊びや体験をとおした総合的な指導を行うことを基本とし、人間形成の基礎となる豊かな心情や創造力、ものごとに自分からかかわろうとする意欲、健全な生活を営むために必要な態度の基礎を培い、小学校以降の生活や学習の基盤を養うことが求められている。

また、小学校教育においては、個人として、国家・社会の一員として、社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度の基礎を身に付け、豊かな人間性を育成するとともに、自然や社会、人、文化など様々な対象とのかかわりをとおして自分のよさ・個性を発見する素地を養い、自立心を培うことが求められている。

このことから幼稚園と小学校では、学校教育の一環として、幼稚園生活の中で培った心情、意欲、態度を生かし、小学校生活においてもそれらを十分発揮し、楽しく充実した学校生活を送ることができるように指導するなど、幼児期・児童期にふさわしい教育の接続を配慮しながら連携を図ることは意義のあることである。

これまでも幼小連携については、幼小連絡会や行事での交流などの取り組みがなされてきたが、一年生が落ち着いて学習に向かえない「小1プロブレム」と呼ばれる問題が起きている。その原因として、子どもの「発達や学び」「生活」は連続しているにもかかわらず、幼稚園と小学校以降の教育の間には、教育の方法や学び方に大きな違いがあるため、移行に際し必要以上の段差となっており、子どもも大きな段差と感じていることが挙げられる。また、教員の相互理解不足により、幼稚園では、小学校教育を意識した学びの指導が不十分であったり、小学校では、幼稚園教育を踏まえ新しい環境に適応させていく指導が不十分であったりする。このように、それぞれの教育課程に基づく教育内容の相互理解を図った指導や子どもの発達や学びの連続性を図るといった観点からの連携はあまり進められてこなかったのが現状である。双方の教育課程に基づく教育内容に対する相互理解を深め、子どもの発達に即して一貫した見通しのある教育を行うために幼小連携を図ることが求められている。そこで、幼小連携を図るための視点を次のようにとらえた。

ア 幼稚園と小学校の教育課程についての相互理解

イ 子どもの発達段階についての共通理解

ウ 学びの接続を考慮した指導

本研究では、幼小連携を図る視点を仲立ちとして相互理解を図り、発達や学びの連続性を重視した幼小連携のカリキュラム作りの研究を進めることとする。

(2) 幼小連携のカリキュラム作りの考え方

ア 幼稚園と小学校の教育課程についての相互理解

教師は、幼稚園と小学校の教育課程の双方の特徴をお互いによく理解した上で、それぞれの教育課程において、子どもへ一貫した教育を行えるように指導の工夫をしていかなければならないものとする。

① 幼稚園の教育課程の特徴

幼稚園教育要領は、幼稚園教育の基本として、教育は環境をとおして行うものであることを明示し、幼児の主体的な活動としての遊びを中心とした生活をとおして、一人一人に応じた総合的な指導を行うこととしている。そのため、幼稚園教育要領に示されている領域は、幼児期に育てたい心情・意欲・態度を踏まえて「ねらい」や「内容」が設定されており、実際に保育をする際の手がかりとなっている。つまり、幼稚園教育要領の各領域に示す「ねらい」及び「内容」については、幼稚園修了までに幼児に育つことが期待される心情、意欲、態度などを「ねらい」として示し、その「ねらい」を達成するために幼児が経験し、教師が指導する事項を「内容」として示している。この「ねらい」と「内容」は、幼児の発達の側面から「健康」「人間関係」「環境」「言葉」及び「表現」の5領域にまとめて示されている。

幼稚園の教育課程は、その幼稚園における教育期間の全体にわたって幼稚園教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにし、幼児の充実した生活を展開できるような全体計画を示している。

② 小学校の教育課程の特徴

小学校学習指導要領に明示されている各教科等は、学校において教授すべき知識・技能等のまとまりを系統的に区分して示したものであり、各教科等の固有の目標やねらい及び内容を系統的・発展的に指導するものである。よって、小学校における各教科等の学習は、基礎的・基本的な内容を確実に身に付け、系統的・発展的に学習を深めていくように構成されている。

小学校の教育課程は、学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画であり、教科の内容や時数を規定している。

イ 子どもの発達段階についての共通理解

① 子どもの発達段階のとらえ

子どもの発達段階のとらえは、研究者によって考え方も年齢の幅も様々であるが、幼児期から児童期の発達と学校制度との関連についての研究者である白川(2001)の8歳頃を一つの発達段階の区切りとするのとらえ方を取り入れ、幼稚園から小学校低学年までを同じ発達段階ととらえることとする。そして、この研究では、幼稚園から小学校低学年までの発達段階を幼児期ととらえ、幼児と児童を分けずに子どもと表すこととする。

② 幼児期の発達の特性

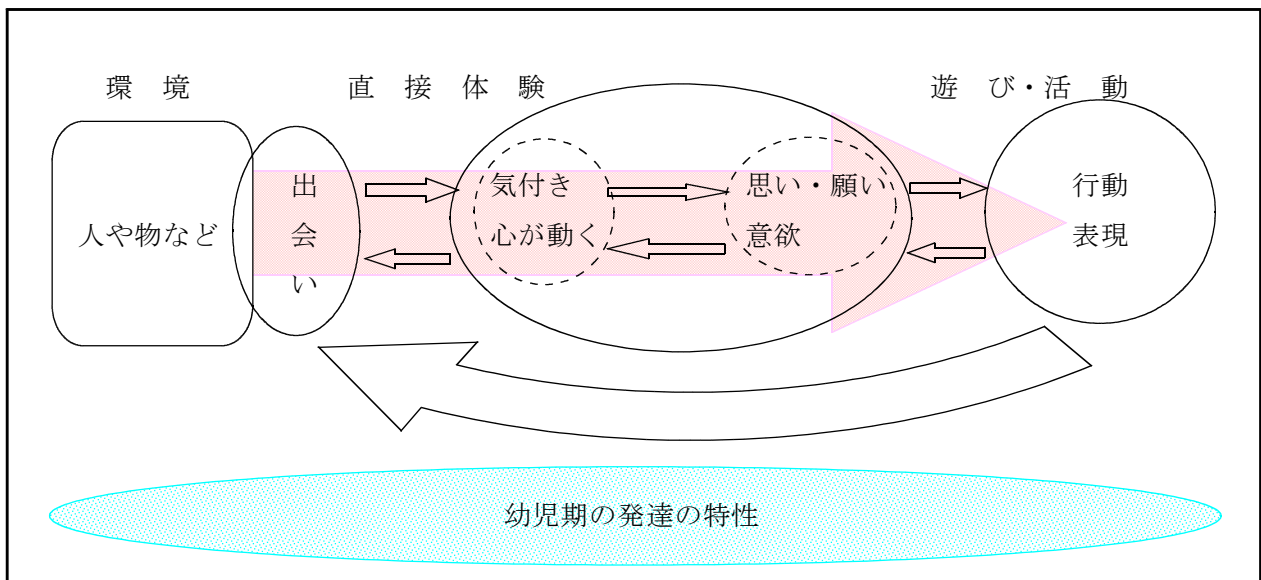
幼児期の発達について、幼稚園教育要領では、自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる時期であり、幼児期の発達の特性を十分に理解して、発達の実情に即応した教育を行うことが大切であることが明記されている。発達が連続していることを重視すれば、小学校低学年においても、幼児期の発達の特性を踏まえて指導していくことが重要であると考えられる。幼小連携において、特に留意しなければならない発達の特性及び具体的な姿は、次ページの【表1】に示すとおりである。

【表 1】 幼児期の発達の特徴と幼児の具体的な姿

幼児期の発達の特徴	幼児の具体的な姿
<ul style="list-style-type: none"> ・身体が著しく発育するとともに、運動機能が急速に発達する時期であり、活動性が著しく高まる。全身で物事に取り組み、我を忘れて活動に没頭する。 	<ul style="list-style-type: none"> よく動く じっとしていることは苦手である 夢中になると周りのことが見えない 自分中心である
<ul style="list-style-type: none"> ・自分でやりたいという意識が強くなる一方で、信頼できる大人に依存していたいという気持ちも強く残っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分でやりたがる 甘えたり、スキンシップを求めたりする
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活経験によって親しんだ具体的なものを手掛かりにして、自分自身のイメージを形成し、それに基づいて物事を受け止めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のイメージでなりきって遊ぶ 物を何かに見立てることが得意である 経験することによって理解していく
<ul style="list-style-type: none"> ・信頼や憧れをもって見ている人の言動や態度などを模倣したり、自分の行動にそのまま取り入れたりすることが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> まねながら覚える 良いことも悪いこともまねる
<ul style="list-style-type: none"> ・他者とのかかわり合いの中で、様々な葛藤やつまずきなどを体験し、善悪の判断などができるようになっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> けんかやつまずきを経験しながら人とのかかわり方を覚えていく 自分の思い通りにならない経験を通して、相手の気持ちに気付き、善悪の判断ができるようになっていく

③ 子どもの発達段階に応じた学びの過程

幼児期は、子どもが周囲の環境にはたらきかけて直接体験をすることで様々な遊びや活動を生み出している。その過程で子どもは、周囲の人や物などの環境に出会い、自らはたらきかけて、気付き、心を揺さぶられ動き、思いや願い、意欲を膨らませて行動したり表現したりし、さらに繰り返しながら学んでいる。そのような能動的な学び方が、子どもの遊びや生活の充実につながっている。学びの過程を【図 1】に示す。



【図1】学びの過程

この学びの過程において、子どもの学びを豊かにするために、直接体験を重視した学びの接続を考慮して指導を行っていかねばならない。なぜならば、幼児期の子どもの学びは、周囲の人や物などの環境に出会い、かかわり合うことから始まり、その直接体験を基に学びを広げ深めているからである。

ウ 学びの接続を考慮した指導

幼稚園では、子どもが周囲の人や物などの環境に直接かかわり、多くの気付きや心を揺さぶられる体験を積み、学びを充実させるような指導が求められている。

また、小学校では、直接体験を基にした学びを重視することが、子どもの学びの接続を可能にすることを考慮して指導していかねばならない。小学校では、教科書を使って、抽象的な思考が求められ、知識や技能を生活とは分化させて学ぶことが多くなるが、直接体験を重視した生活科が導入されたことにより、子どもは、課題解決の力を育むために自ら課題をみつけ、直接体験をとおして探究する学習が行われている。

生活科は、具体的な活動や体験をとおして、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うということをねらいとしており、これは、幼稚園教育のねらいと共通している。幼稚園と小学校の生活科での学びの過程とねらいは共通であり、生活科は、子どもの学びの接続を可能にする教科である。

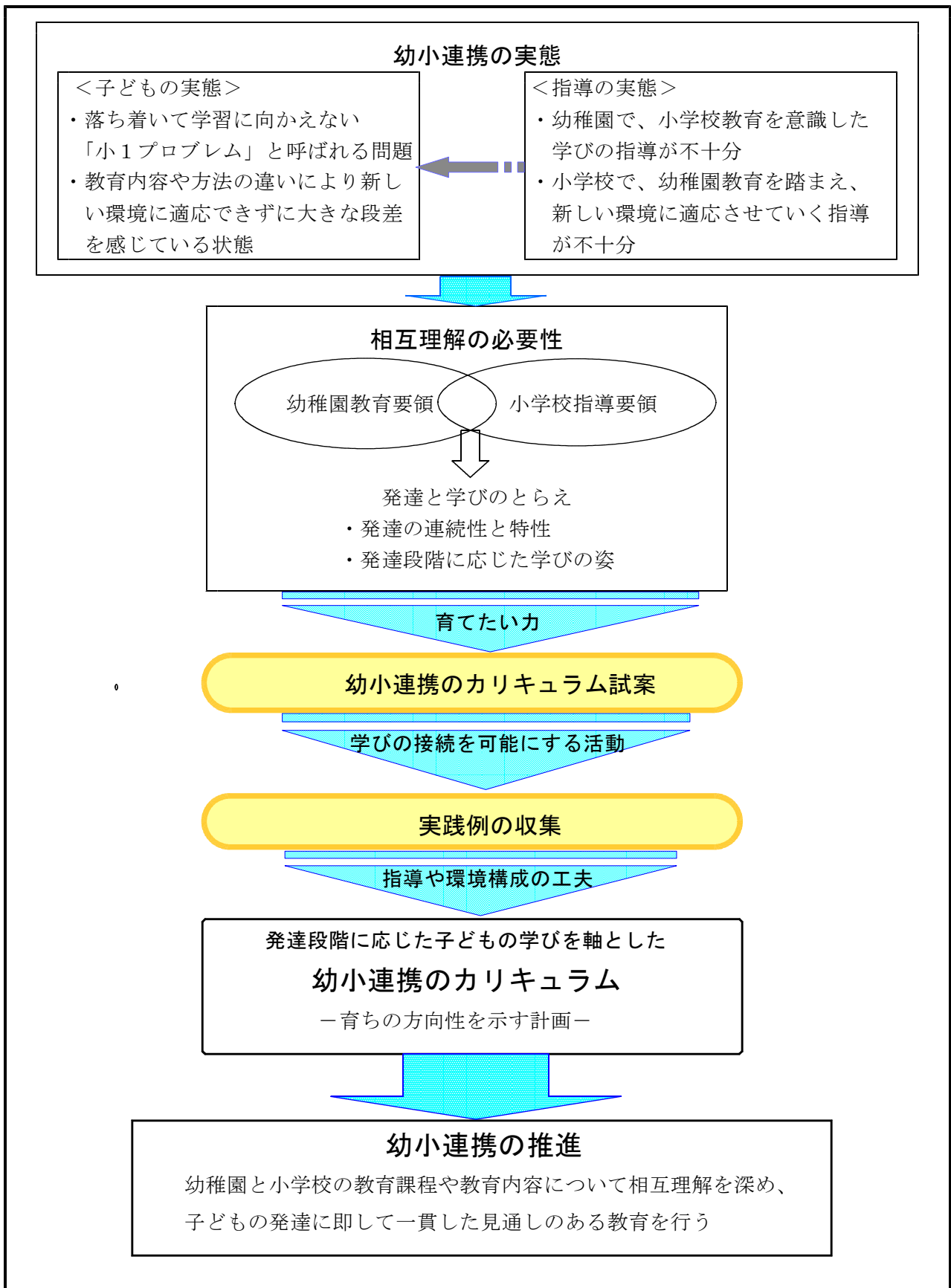
また、幼稚園では、5領域の内容を総合的に学んでいるが、小学校では、学習内容が教科に振り分けられる。小学校指導要領では、低学年においては生活科を中核として国語、音楽、図画工作など他教科等との合科総合的な指導の工夫をすすめ、指導の効果を一層高めるようにする必要があると示している。単元又は一コマの時間の中で複数の教科の目標や内容を組み合わせる合科的指導は、思考や知識が比較的未分化な低学年の子どもの実態に応じた学習であり、幼稚園での総合的な学びと接続を可能にする学習である。生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動は、体験をとおして総合的に学ぶ幼稚園での学びと接続を可能にする活動である。

以上のことから、幼稚園では、子どもが周囲の人や物などの環境に直接かかわり、多くの気付きや心を揺さぶられる体験を積むことが小学校での学びにつながることを踏まえて、指導していく必要がある。小学校では、前述したように幼児とほぼ同じ発達段階にある小学校低学年の子どもたちにとって、学びの内容や質が変化することを踏まえ、学びの接続を可能にする生活科や生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動を重視し、子どもの学びの接続を考慮した指導をしていかねばならない。

また、一年生が大きな段差を感じる理由として、人や物などの周囲の環境が大きく変わることが挙げられるが、このことに対して教師が指導の工夫や環境構成の工夫を行うことによって、段差を軽減できるのではないかと考える。

(3) 幼小連携のカリキュラム作りについての基本構想図

これまで述べてきた基本的な考え方を踏まえ、本研究の基本構想図を【図2】のとおり作成した。



【図2】幼小連携のカリキュラム作りについての基本構想図

2 発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム試案

幼稚園と小学校の異なる特徴をもつそれぞれの教育課程を損ねることなくつなげるためには、教育課程の概念がより広い幼稚園を基本にすえて、全体的な計画という大きな区切りで見直すこととする。そして、幼稚園年長児の小学校への期待や関心が高まっていく後半から、一年生が小学校の生活に慣れてくる一学期を、幼小連携において特に配慮の必要な時期ととらえ、カリキュラム作りをすることとする。

幼小連携のカリキュラムの作成においては、子どもの気持ちや実態に応じることを大切に考え、小学校生活への期待が子どもの成長につながり、小学校で新しい環境の中で不安や緊張を乗り越え主体的に学ぶ姿勢が形成されるように留意する。

(1) 年長児後半におけるカリキュラムの留意点

幼小連携の前期に当たる幼稚園年長児後半の子どもたちは、小学校への関心が高まると同時に新しい環境への不安も強くなっていく。幼稚園の生活には、十分慣れており自己発揮してすごしている時期であるが、人とのかかわりがまだ十分にできていない子どもも見られる。そこで、友達とのかかわり合いが多くていくこの時期には、「人間関係」を深め、学び合いを充実させる協同的な活動を取り入れていく必要がある。教師との信頼関係を基盤に、同年齢の友達や異年齢の友達とのかかわりを深め広げていく中で、主体的に学ぶ姿勢を育むことが重要であり、自分たちで遊びや生活を創り出す経験をしていくことが小学校での学級を中心とした友達との学び合いにつながると考える。

また、友達と一緒に力を合わせて目標を達成した満足感や新しいことに向かっていく意欲につながり、困難を乗り越えた経験は、自信となり、小学校での新しい環境での生活の不安やつまづきを乗り越えていく力につながると考える。

この時期以前も、5領域のねらいや内容を総合的な活動をとおして指導してきているが、この時期は、特に領域「人間関係」を重視した活動を構築し、学びの接続を考慮した指導を工夫していくことが必要である。

(2) 一年生一学期におけるカリキュラムの留意点

後期に当たる小学校一年生一学期は、小学校に入学した喜びに満ちあふれ、小学校の生活や学習に意欲的に向かおうとしている。しかし、新しい環境の中で生活に慣れていくまでは、緊張もあり不安定な時期である。子どもたちの不安や緊張を受け止めながら、教師との信頼関係を築き、安心した気持ちで過ごせるようになっていく指導が求められる。幼稚園での学びを生かしながら、生活と結びついた具体的、体験的な学びをとおして安定した状態で生活できるようになっていくためには、体験をとおした学びである生活科の学習や、生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動は、学びをなめらかに接続していく上で重要である。

(3) 交流活動における留意点

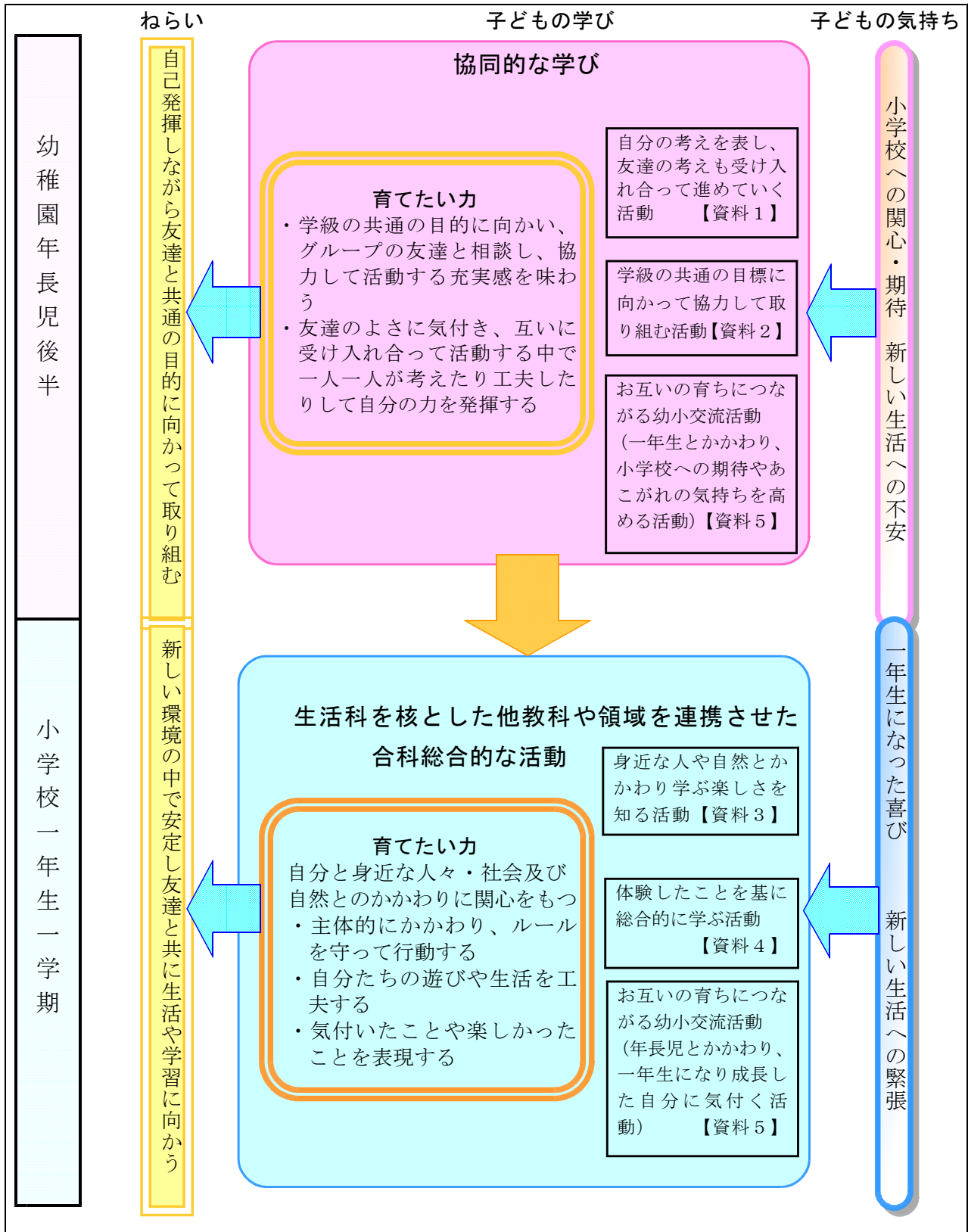
年長児後半の時期に、年長児が一年生と交流活動を行うことは、子どもが新しい人間関係を学び、身近な社会へ興味関心を広げていく機会となり、そのことは、小学校生活への不安を軽減し、一年生へのあこがれの気持ちを高め、小学校教育への移行をなめらかにするものと考えられる。また、一年生一学期に、一年生が年長児と交流活動を行うことは、子どもが成長した自分に気づき小学生としての誇りや自覚を育むことにつながる。

幼稚園では、交流活動を指導計画に位置付け、小学校では、交流活動を生活科の中に位置付け、双方の子どもとの人間関係の育ちとねらいに合わせて行うことが大切である。また、双方の子どもとの育ちにつながる活動となっていくように、幼稚園と小学校で交流計画を立てて取り組むことが必要である。

これらの留意点から、学びのなめらかな接続を可能にするには、次のようなことが重要であるととらえた。

- ① 小学校での学び合いの基盤をつくる、幼稚園における協同的な学びの充実
- ② 幼稚園での学びを生かし、生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動の工夫
- ③ お互いの育ちにつながる幼小交流活動の推進

以上のことを踏まえ、発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラムを作るにあたり、幼稚園での協同的な学びと、小学校での生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動をとおして育てたい力をとらえ、幼稚園と小学校での学びの姿を実践例をとおして明らかにしていく試案を【図3】のように考えた。



【図3】発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム試案

3 試案に基づく実践例

次に、試案に基づく実践例を【資料1】から【資料5】に示すこととする。

【資料1】幼稚園年長児（10月）自分の考えを表し友達の考えも受け入れ合って進めていく活動

幼稚園での学び

教師の指導

- 子どもの実態 ・9月の運動会で、年長児としてみんなで力を合わせて取り組み、どの子も満足感を味わった。
 ・自分の考えを言葉で表せる子どもが多いが、自分の考えを通そうとする子どももいて、話し合いがうまく進まないこともある。
 ・絵や製作の活動で喜んで表現するようになってきているが、表現の仕方が幼かったり、できばえを気にしたりする子どももいる。
- 活動名 友達と一緒にカレンダーを作り、地域のお世話になっている人たちにプレゼントする
- 活動の意図 ・みんなと協力して取り組む活動を通して、自分の気持ちを言葉で表したり、友達の考えに気付いたり、自分の気持ちを抑えたりしながら同じ目標に向かって取り組めるようにしたい。
 ・カレンダー作りをとおして、絵や製作による表現の工夫、数字への関心、地域の人々への関心や感謝の気持ちも育てていきたい。
- 活動の計画 ・カレンダー作りについて話し合う（活動について知り、アイデアを出し合い計画を立てる）
 ・絵のテーマと作り方をグループごとに話し合い、製作する（本日の活動）
 ・カレンダーに数字を書く
 ・カレンダーを郵便局、駐在所、消防署に届ける

本日の活動のねらい グループのみんなで考えを出し合い、工夫しながら表現し、協力してカレンダーを作る

全員を話し合いに向け、一人一人が考えを表し、友達の考えを聞きながら、自分たちで話し合いを進めていけるように援助する



話し合いの場面

- T カレンダーの絵は何にしようか
 グループで相談しましょう
 C 恐竜がいい
 C 動物がいい
 C え～、絶対、虫がいい(寝っ転がる)
 T みんながいいのにするにはどうしたらいいかなあ
 C じゃあ1枚目は恐竜と動物にして表紙は虫にしたら？
 C それいいね。それいい人？
 C そうしよう 全員賛成する



できあがった表紙



今までの折り紙の経験を生かして工夫した表現

◇育てたい力

- ・自分の考えを表し、友達の話もよく聞き受け入れていく力 活動の始まりの段階で行われる話し合いは、自分の考えを言葉で表し、友達の考えもよく聞いて受け入れていく力を育てる大事な場面である。話し合いをとおして、共通の目的やイメージができていき、活動への意欲を高め、新しいアイデアを思いついたり、自分の感情を静めたりしていく経験になる。少人数のグループでの活動の中で自分を思う存分出して、受け入れられたり受け入れられなかったりすることをたっぷり経験することが必要である。
- ・表現する楽しさを感じながら、今までの経験を生かして工夫して表現する力 幼児は、動き、言葉、絵、音などで素朴な形で自己表現を行う。幼児らしい様々な表現を楽しみながら、しかも友達と一緒に表現活動を行うことで、友達の良さにも気付く表現方法や感性を豊かにしていくことにつながる。

◇指導や環境構成の工夫

- ・ねらいの明確化と活動の選択 教師が子どもの実態を十分に把握し、どのように育てていきたいかという教師の願いに基づき、ねらいを定め、ふさわしい活動を選択し計画、指導していくことが重要である。個人、グループ、学級の課題や目標をとらえて指導し、活動後に評価反省することが学びを深める指導につながる。年長児の後半の時期は、表現活動が盛んに行われるが、一つ一つの活動のねらいを明らかにし、バランスよく協同的な活動が行われるように工夫することが必要である。
- ・つまずきの場面での援助 話し合いの場面では、できるだけ自分たちで話し合いを進めるようにし向けながら、課題ととらえている子どもには、考えを表したり、我慢したりできるように援助していく。製作に不安でいる子には、つまずきの原因をとらえ、イメージがもてるような言葉をかけ、表現したものをほめて、子どもが表現する喜びを感じ、表現への意欲を高めていけるように援助する。子どもが困っている時、自分から教師に話せるように援助することも必要である。このようなつまずきや葛藤は、協同的な活動であるがゆえに起こり、子どもが成長するために大切な指導場面である。教師は、子どもが自分で乗り越えたと感じられるような援助の仕方を工夫していかなければならない。
- ・子どもの工夫が生まれてくる環境構成の工夫 今まで幼稚園で経験してきたことを生かし、さらにその子らしい工夫が生まれてくるような題材や材料を用意し、ヒントを与えていくことが子どもの経験を広げていく。経験を積み、手指も器用になってきているので新しい経験を加え、表現方法を増やしていくことも小学校での学習につながる。

小学校での学び

先生や友達の話をよく聞き、自分の考えを表現することは学習の最も基本となる。表現する楽しさを感じさせることは感性を育て、全教科における関心・意欲・態度の素地を育てることになる。

【資料2】幼稚園年長児（11月） 学級の共通の目標に向かって協力して取り組む活動

幼稚園での学び

子どもの様子

教師の指導

子どもの実態・今までの遊びを発展させ友達と一緒に協力して遊びに向かう姿が見られるようになってきた。

- ・お店ごっこに関心があり、数人で楽しむ姿が見られる。
- ・自分の思いどおりに遊びを進めたり、友達とかかわり合う言葉が足りない子どももいる。

活動名 「パンダランド（お店ごっこ）」に小さい組を呼ぼう

活動の意図

- ・いろいろな友達とかかわり合う経験をとおして、自分の気持ちを相手にわかるように表したり、場面によっては気持ちを我慢したりして自分の気持ちの調整しながら遊べるようにしたい
- ・今までの遊びの経験を生かし、さらにアイデアを出し合いながら自分たちで遊びを計画準備し、学級のみんなで一つの目標に向かって力を合わせる経験をさせたい

活動の計画

- ・お店ごっこについて話し合う（お店の名前、お店の種類、遊び方、計画を立てる）
- ・お店の準備（1週間） 小さい組には内緒で進め、近くなってから知らせ、誘う
- ・お店を開く（本日の活動）

本日のねらい

- ・友達や小さい組の子ども達に進んでかかわり、楽しく遊べるように工夫する
- ・組のみんなで目標に向かって取り組み、楽しさや成し遂げた満足感を味わう

「パンダランド」の内容（一部）

子どもの発想を取り入れ役割分担をしてかかわり合いが多くなるようにする

コイン交換



お金を入ると
コインがです。

サメたたきゲーム



サメが出たら、
たたいていいよ。

シール屋



いらっしやいませ
どれがいい？

ピンボールゲーム



順番に並んでくださ
い。20点取った人は
もう一回できます。

レストラン



お待たせしました。
ぶどうユースです。

◇育てたい力

- ・じっくり取り組む力 子どもは、対象に没頭し遊び込むことで、考えたり試したり工夫したりしながら自分の力を発揮していくようになる。遊びの中で対象がもつ特性や仕組みを理解し、環境にかかわる態度を身に付けていく。
- ・人とかかわり合い、かかわりの中で自分を表現する力 友達とかかわり合って学ぶ楽しさを実感しながら、相手にわかるように自分を表現する力を育てたい。異年齢の友達とかかわり合いは、相手に合わせて相手がわかるように表現して伝えることが求められ、言葉で表現する力を育む良い機会となる。
- ・友達と協力して目標に向かう力 仲間意識が育ち深まるこの時期に、学級全体で共通の目標に向かって協力する力を育て、友達とかかわり合って学ぶ楽しさを実感させたい。

◇指導と環境構成の工夫

- ・子どもの発想を生かしみんなの活動につなぐ指導 数人での遊びであった「お店ごっこ」を学級全体の活動として子ども達に投げかけ、興味をもたせていった。幼稚園や家庭での遊びの経験から出てきたコイン交換やゲームコーナーなどのアイデアを生かし、意欲的に取り組めるような指導が行われた。
- ・かかわり合いが多くなる援助 話し合いをしながら、共通の目標をとらえ、役割分担や準備の計画も自分たちで進められるような援助が必要である。教師が子どものグループ構成に配慮し、かかわり合いが多くなるような遊び方や子どもの動線を考えた遊びの配置の工夫がなされていた。当日の活動の中で、同じ店のメンバーで役割を分担したり、混んでいる他の店を手伝ったりして助け合ったり、小さい子ども達に進んでかかわるなどふだんの活動ではできにくいかわり合いの姿が多く見られた。楽しい遊びの中で、自分の思いどおりにならなくとも少し我慢できたり、小さい子に合わせて遊び方のルールをわかりやすく説明する姿も見られた。1時間以上遊びが続き、「また明日もしたいなあ」「またみんなでやろうよ」という声も多く、学級のみんなで力を合わせて取り組んだ楽しさや満足感が感じられた。
- ・じっくり遊ぶ時間の保障 じっくり遊びながら工夫したり、試したり、文字や数への関心を広げたり、つまづきを乗り越えたりする経験ができるように時間に余裕をもって計画をたて準備を進めることが大切である。この活動の中では、看板作りで文字を書いたり、コイン交換で数を数えたり、ゲームが楽しくなるように工夫したりする姿も多く見られた。また、日にちや時間の目標を設定して、時間を意識して行動できるような工夫も必要である。

小学校での学び

集団生活に馴染み、集団における自分の存在に気付く、共によりよい生活ができるようになっていく

【資料3】小学校一年生（6月）身近な人や自然とかかわり学ぶ楽しさを知る活動（生活科）

幼稚園での学び

子どもの様子

教師の指導



子どもが身近な自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心もてるような環境を用意する。教師自身がモデルとなり、世話をしたり、遊びへの利用の仕方を示したりしながら、子どもに関心をもたせる働きかけをする。教師は、子どもの発見を取り上げ、世話や遊びをとおして、関心を深めたり、友達にも広げていくように援助する。子どもに、教師と一緒にいる安心感を感じさせながら、信頼関係をもとに多くの直接体験を与えるようにする。

小学校での学び

単元名 「はないっぱいになあれ」（草花・野菜栽培）

本時のねらい アサガオのお世話をしよう

授業の流れ

- ・自分のアサガオを見に行く
- ・気づきを発表し、どのようにしたらよいか考える
- ・世話をする
- ・世話をしながら気付いたことを発表し合う
- ・気づきを絵と文に表す



○ちゃんのつぼみがいっぱい出てきてる。ぼくのは3個だよ。○くんは、いくつ？

「困っているアサガオがあるよ。みんなのアサガオはどうか？」と、ベランダに置いてあるアサガオを目的をもって見に行き、気づきを導き出す言葉かけをする。

あっ、つるが伸びてきたぞ。つるがからまっているから離してあげよう。そろそろ支柱を立てよう。

葉っぱは、大きいのと小さいのがあるよ。毛が生えてると生えてないのがあるぞ。茎にも生えてるよ。枯れてきた葉っぱがあるけど大丈夫かなあ。

しまった。土がすっかり乾いてた。水をたっぷりあげよう。あっ、○ちゃんのも乾いてるよ。

一人一人の気づきを発表させることで、友達の気づきも知り、さらに関心を広め深めていくように支援する。

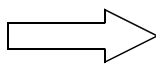
◇学びのつながりと育てたい力

- ・学習内容のつながり 幼稚園では教師と一緒にアサガオなどの植物に直接かかわりながら関心をもたせるように働きかけている。小学校では一人ずつ自分の鉢植えで「自分のアサガオ」として育てることにより、関心の深まりや世話への意欲が感じられた。幼稚園での世話や花びらや色水の遊びの経験が、小学校でのアサガオの学習にもつながっており、学習内容のつながりが確かめられた。年齢に応じて環境とのかかわり方を変え、前の経験を生かしながら気づきを豊かにしていくことが学びを深めていく。幼稚園で、身近な自然とじっくりかかわりながら発見したり、考えたり、試したりする経験を十分にすることが必要である。
- ・生活科の学びと育てたい力 身近な人や自然と直接かかわりながらの気づきを基に進められる生活科の学習は、幼稚園での学びと似ており、子どもが学校で学ぶ楽しさを感じながら、いろいろなことに興味関心をもちじっくり取り組む力や友達とかかわり合う力を育むことができる。また、気づきを文字や絵で表すときに、国語科や図画工作科での学習を生かし、自分の考えを表現する力も育っていく。生活科での学びが、子どもの興味や関心を一層高め、他教科へ生かしていくことができる。

生活科（草花・栽培）

「アサガオをそだてよう」

直接体験をしながらの気づき



気づきを文字で表す（国語科）

気づきを絵で表す（図画工作科）

◇指導と環境構成の工夫

- ・多くの気づきを導き出す指導 子どもの気持ちに添った言葉かけがあり、直接アサガオにかかわり合う観察や世話の時間を十分取ったことで多くの気づきがあり、一人一人の気づきの発表を丁寧に受け止め、学級全体へ広めていくことで意欲的に学ぶ姿が見られた。
- ・気持ちの安定につながる指導と環境構成 子どもは、まだ気づきを文字で表すことに慣れていないので、教師は、時間を多めに取って個人差に応じたり、子どもの必要感に応じて支柱を立てたり、実物を使って具体的に教えたりすることは、子どもの理解を促し、学習の意欲や気持ちの安定につながっていく。この時期は、ずっと席に腰掛けて学習することは難しいので、体を動かしたり、教師と一対一でかかわり合ったりできる場面を授業の流れの中に組み入れることも子どもの気持ちの安定につながり、教師との信頼関係ができていく。また、教室には、生活と結びついた明るい雰囲気や壁面構成や、生活の流れをわかりやすく絵で表示されていた。このような雰囲気作りや工夫も子どもの気持ちの安定につながっている。

生活科で自分のアサガオを育てる体験をし、アサガオへ深い愛着を感じている。

図画工作のねらい

<表現> 自分で育てたアサガオを見て、感じたことや想像したことなどを絵に表す

授業の様子

場面1 お話し作り

T「もし、どんどん自分が小さくなってアサガオのところで遊ぶとしたらどんなことをして遊ぶ？」
 C「つるでブランコをして遊びたいなあ。」
 C「花のくぼみで滑り台をしたいです。」
 C「花びらのコートでサッカーをしたい。」
 C「葉っぱの上で昼寝をしたいなあ。」
 C「〇〇ちゃんと一緒に遊んでいるところにしよう」
 C「先生も描きたいなあ、先生は何色の服が好き？」
 C「〇〇ちゃんのこと描いたよ〜。」など
 会話もしながら友達も絵に登場する。

アサガオの日々の変化に一喜一憂して世話をしてきた子ども達の「もっとアサガオと仲良くなりたい」気持ちを絵の中に表現させたいと考えてお話し作りをした。



図画工作の前時のねらいである絵の具の混色の仕方を、今、学習している算数のたし算の形で表し、関連付けて学べるように工夫した。

場面2 混色についてのまとめ

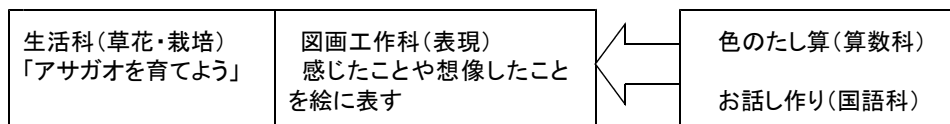
T「色のたし算をしたら、絵の具の中に無い色ができたよね。アサガオの花の紫色は何色と何色のたし算だったかな？」
 C「赤たす青です。」
 T「緑もたし算で作ったよね。緑は？」
 C「青たす黄色です。」
 T「空の色は？」
 C「青たす白です。」
 C「先生、絵の具ってひき算もできるかなあ。」
 T「どうかしらねえ。絵の具に聞いてみないとわかんないなあ。」 子ども達の笑いが起きる

◇学びのつながり

・生活科との合科総合的な活動における学び 指導した教師は、「アサガオの花やつる、葉の形に着目したいろいろな遊びを想像しながら描いており、アサガオへの関心の深さや親しみが絵に表れていた。」と成果を感じている。子どもにとっても、体験したことを基に総合的に学ぶことは、幼稚園での学びと似ており、抵抗感が少なく学ぶ目的も自然にもつことができる。生活科の学習と他の教科の学習を合科したり関連付けたりすることにより、子どもの興味や関心が一層高まり、双方の目標が同時に達成される。また、生活科との合科総合的な学習は、子ども達に、体験から得たことを次に教科で学ぶ意義を理解させていく。

生活科を核とした合科総合的な活動

関連的な指導



・幼稚園での学びとのつながり この活動の中で、幼稚園での色水遊びの混色やお話し作りの経験での学びが活かされていた。ごっこ遊びや表現遊びをとおして、自分のイメージをもち表現する楽しさや、色水遊びなどの科学遊びの中で試したり工夫したりしながら不思議さや発見の喜びを感じる経験が小学校での学びにつながっている。

◇指導と環境構成の工夫

・関連付ける指導の工夫 生活科自体が総合的な学習であるが、子どもの生活や思考に沿って活動を考え、意図的に合科総合的な活動を計画し指導することによって大きな成果を生み出すことが可能になる。子どもが体験したことを基に、関連付けながら理解を広げたり深めたりしていけるような指導の工夫が必要である。

・楽しく学べる状況作り 子どもの気付きを促し、受け止め、認めていく指導の工夫により、子どもは学ぶ楽しさを感じ、教科学習にも積極的に取り組んでいくことができるようになっていく。子どもは絵の具の道具などの扱いには不慣れなので、教師は、扱い方や手順を丁寧に繰り返し教え、時間配分、机の配置、動線の工夫などにより、楽しく学べる状況作りが大切である。

【資料5】幼稚園年長児と小学校一年生 お互いの育ちにつながる幼小交流活動

対象 花巻市立花巻幼稚園年長児 花巻市立花巻小学校一年生

幼稚園での学び 小学校での学び

【表2】幼小交流年間計画

交流の目標 年長児 小学生との交流を通して、小学生とのかかわりを喜び、小学校への期待をふくらませる
 小学生 幼稚園児との交流を通して、自分の成長に気付き、喜びをもって意欲的に生活をする
 連携の視点 子ども達の具体的な姿から話し合い、「段差を乗り越える力」の育成に必要な経験を考えたり、互いの教育で大切にしていることを感じる

ねらい		子どもの思いや目指す子どもの姿		交流活動内容
幼稚園	小学校	幼稚園	小学校	
小学校に目を向ける	幼稚園を意識する	大勢の小学生の元気良さに驚いたり、かっこいいと感じる		5月小学校運動会総練習を見る
ペアの相手を知り小学生に関心をもつ	園児の様子をうかがいながら、合わせて優しく接することができる	・一年生の言動に関心をもつ ・ペアの小学生と一緒に遊び、ダイナミックさや優しさを感じ、安心感を抱く	・ペアの園児を意識して行動し、年長者と思われる気持ちよさを感じる ・園児の気持ちを聞き、動きをリードしていく	6月「なかよし集会」 ペアの子と児童公園で楽しく遊ぼう <交流活動1回目>
集会の雰囲気を感じ取りブル遊びを心待ちにする		・小学校の先生の話に関心をもって聞き、応答する ・アトラクションの泳ぎに驚く	・園児の参加を喜んで受け入れる ・張り切って泳いでみせる	6月小学生が全員集合するブル開きに参加する
グループのメンバーとのつながりを感じ自己発揮する	グループの仲間の様子を見、わかり、触れ合いを深め、お互いの良さを知る	・ペアの一年生と会話が弾むようになる ・同じバッジをつけた仲間を意識し、顔や名前を覚えようとする ・同じグループの仲間として触れ合いを楽しみ応援し合う	・ペアの園児やグループの仲間での動きを見ながら進んで活動する ・同じグループという意識を持ち、応援したり、認め合う	9月「ゲームをしよう」グループで触れ合いゲームや競争ゲーム <交流活動2回目>
校庭のトラックを走る気持ちよさを知る	力いっぱい走る姿を見せたり、園児を導いたりして走る	・いっぱい走っていい気持ち ・一年生と一緒に走って嬉しい	・校内マラソンに向けて頑張っている姿を見て走る、大変だけど頑張る	9月一緒にマラソンしよう（一年生体育の時間）
発表に関心をもって観る	張りきって演じる	・大きな声で元気よく演じている姿を見て小学生は「すごい」と感じる	・園児に見せる気持ちで張りきって演じる	10月発表会練習へようこそ
大きな風が揚がる様子に感動する		・手作り風が揚がるのを喜んで見る ・どうやって揚がっているのか、何で作っているのかなど関心をもつ		11月風揚げを見る
教室やトイレなどを実際に使い、一年生になることを期待する	学校紹介や教室での活動を通して学校のことを教える	・教室をはじめ、学校の施設を案内してもらい、わくわくする ・仲良しになった友達と楽しく過ごす	・仲良くなった園児に進んで様々なことを教える ・楽しかった一年間を振り返り、自分の成長に気付く	2月もうすぐ一年生 <交流活動3回目>

【表3】幼稚園教育課程年長児「人間関係」指導内容（花巻幼稚園）

【表4】年間単元配列表一年生生活科（花巻小学校）

期	期間	ねらい
V	4月 5月	・手伝いや仕事を喜び、自分たちでやろうとする ・みんなと一緒に何かをすることを喜び、楽しむ ・集団遊びを通して友達とのつながりを楽しむ ・4歳児を受け入れ、自分なりにかかわる
VI	6月 8月	・友達の気持ちを考えながら話したり動いたりする ・ルールのある遊びに参加し、友達と一緒に楽しむ遊ぼうとする ・気の合う仲間とのつながり、一体感を感じ、より楽しく遊ぶ ・教師や友達と一緒に生活を進めることを喜ぶ
VII	9月 12月	・友達の良さを認め、受け入れていく ・自分、友達双方の思いが満たされるようなかかわり方をしようとする ・アイデア、イメージを出し合いながら、遊びを充実させていく ・気持ちを合わせて仲間と共にひとつのことに取り組む心地よさや充実感を味わう
VIII	1月 3月	・きまりの大切さに気付き、互いに声を掛け合いながら守ろうとする ・友達とかかわる楽しさを十分味わうとともに、自分のやりたいことを自分なりに追求しようとする ・役割を担い、人の役に立つうれしさや、生活をつくりていく気持ちをもつ ・生活に見通しをもち、自分たちで進めていくことを楽しむ

大単元名	小単元名	時数
みんななかよし	①ともだちになろう	3
	②がっこうたんけんをしよう	6
	③みつけたよやったよ	3
はなをさかせよう	①たねまき	2
	②おおきくなあれ	2
ようちえんとなかよし1		6
いきものとなかよし	①いきものとあそぼう	3
	②いきものだいはいけん	3
あそびにいこう	①がっこうのまわり	2
	②あそびばにいこう	3
	③くさはなやむしとあそぼう	3
	④もうすぐなつやすみ	3
	⑤たねとり	3
あきとなかよし	①あそびばにいこう	2
	②あきとあそぼう	2
	③おちばやこのみ	5
ようちえんとなかよし2		6
うちのしごとめいじん	①しごとめいじんをさがそう	2
	②チャレンジしよう	4
	③こんなことができたよ	3
ふゆとなかよし	①もうすぐふゆやすみ	2
	②ふゆとなかよし	4
ようちえんとなかよし3		5
もうすぐ 2ねんせい	①はるをみつつけよう	2
	②1ねんせいをむかえよう	5

※ねらいについては、【表5】を参照のこと

【表5】小学校一年生生活科単元「幼稚園となかよし」単元構想表

単元の目標 幼稚園の年長組との交流を通して、お互いに高め合おうとする中で、自分の成長に気付き、喜びをもって意欲的に生活することができる

	1学期「なかよし集会をしよう」	2学期「ゲーム集会をしよう」	3学期「学校を紹介しよう」
ねらい	ぼくだっておにいさんおねえさん 幼稚園の子に合わせて優しく接することができる	やさしいおにいさんおねえさん ゲームを通して仲良く協力したり工夫したりして触れ合いを深めお互いの良さを 知る	えっへん すっかり小学生 学校紹介(案内)を通してお互いの交流を 深め、進級・入学に向けての意欲を高め る
指導内容	・話し合い ・プレゼント(バッチ)招待状作り ・なかよし集会(ペア・ぐるーぷ) ・声のおたより	・話し合い ・招待状作りとゲーム集会の準備 ・ゲーム集会(リレー・集団ゲーム) ・手紙を書こう	・話し合い ・招待状作り ・役割分担と準備 ・学校紹介 ・活動のまとめ
関心 意欲 態度	幼稚園の友達に親しみをもって接し、 ペアの子やグループと進んでかかわろ うとする。	幼稚園のペアの子との交流を深めよう として、進んで活動しようとする	1年間の交流をもとに、進んで園児に 学校のことを紹介しようとする
活動や体験に ついての思考	園児に喜んでもらえるようにプレゼン トを作ったり、仲良く遊ぶための準備 を考えたりすることができる。	ペアの園児に合わせて、適切な活動を することができ、感想を絵や文に書くこ とができる。	園児に学校のどんなことを紹介する か考えてグループで表現することが できる
身近な環境や 自分に付いて の気づき	ペアの園児の様子から、自分と の違いに気付く	ペアの園児や他のペアの様子か ら自分との違いに気付く	学校紹介をする中で、1年間の 自分の成長に気付く

活動の様子

一年生から大きな招待状が届く



明日、一緒にゲームをして遊ぼうね。楽しみにしています。

一年生の案内で学校探検をする



校長室へようこそ。わたしの名前は、〇〇です。

親しくなって会話がはずむ



一緒に遊んで楽しかったね。また、会おうね。

◇育てたい力

・身近な人への興味や関心を広げていく 年長児にとって小学生との交流は、未知なるものに興味や関心をもつよい機会となる。特に、入学が話題になってくる後半の時期には、小学校への期待とともに不安も感じてくるので、小学生とのかかわり合いをとおして、小学校への関心を高め親しみを感じていくことが安心感につながっている。また、小学校一年生にとって、自分より年少の子どものかかわりは、人間関係を学ぶよい機会となり、自分が身に付けた力を発揮したり新たな気づきをしたりできる格好の学習場面であり、成長する自分を意識する場面になっている。

◇指導の工夫

・話し合いによる共通理解 交流活動を行うに当たっては、十分に話し合っ、交流の目的や育てたい力を明確にし、時間や場所、内容などについて共通理解を図って、お互いに実り多い活動となるように配慮しなければならない。初めは、お互いの行事などを見合うことから始めていき、その後、一緒に交流の年間計画をたて、幼稚園と小学校の双方の教育課程に交流活動を位置付けることにより、見通しをもって取り組めるようになった。

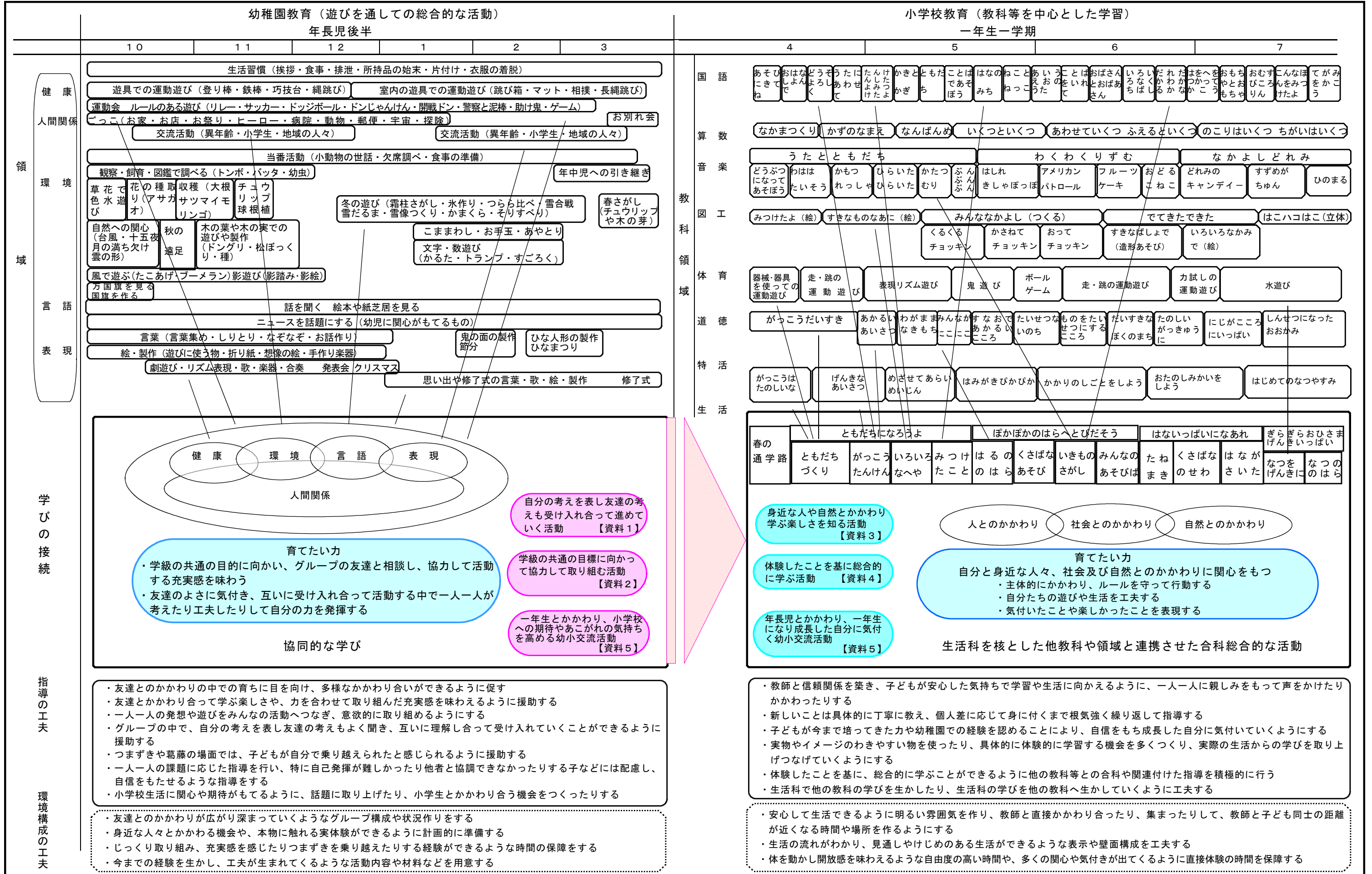
・交流することによる成果 双方の教師は、事前の打ち合わせで、お互いの目指す子ども像を確認し合い、指導者全員がイメージを共有して、具体的な活動の内容や流れを話し合った。教師同士が、年長児と一年生の発達の姿をとらえ、指導したことで子どもの学びの姿を確認することができた。幼小交流を経験した年長児が一年生になり、立場を変えて交流を経験していくことにより人とかかわる力の育ちが見えてきた。交流することにより、教師同士が親しくなり連絡をとりやすくなったことが、子どものなめらかな接続を考慮した指導に生かされている。

【資料1】から【資料5】までの実践例より、なめらかな接続を可能にするには、幼稚園での協同的な学びの充実、生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動の工夫と、幼小交流活動の推進が重要であることが確かめられた。

4 発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム作成

これらの活動の重要性を踏まえ、発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラムを作成することとする。

【図4】発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム



5 幼小連携のカリキュラム作りに関する研究のまとめ

本研究の目標は、発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム試案に基づき、実践例を収集し、発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラムを作成することであった。学びの接続を可能にする活動として、幼稚園年長児後半の協同的な学び、小学校一年生一学期の生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動、幼小交流活動を提案し、実践例を収集し、次のような成果と課題を得ることができた。

(1) 成果

試案に基づき、発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラムを作成し、以下の三点について提示することができた。

- ア 幼稚園年長児後半において、小学校での学びの基盤になる活動であることを踏まえ、領域「人間関係」を中心とした活動をとおして指導や環境構成の工夫によって協同的な学びを充実させていくことが小学校での学びに接続すること
- イ 小学校一年生一学期において、幼稚園での学びを生かし、具体的な体験を基に関連付けた総合的な学びとなる生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動の指導を工夫していくことが幼稚園からの学びと接続すること
- ウ 幼小交流活動は、幼稚園と小学校の教師の共通理解に基づき、交流計画をたて、子ども同士の間関係や興味関心を広げていく指導を工夫することにより、子どもの育ちを促し、なめらかな接続を可能にすること

(2) 課題

本研究では、幼小連携のカリキュラム期間を幼稚園年長児後半から一年生一学期ととらえ作成したが、一層なめらかな接続を考慮した指導を充実させるためには、カリキュラム期間を延長するなどの検討が必要であること

V 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 幼小連携のカリキュラム作りに関する基本的な考え方

先行研究や文献を基に、幼小連携を図る意義に基づき、幼稚園と小学校の教育課程についての相互理解、子どもの発達段階についての共通理解、学びの接続を考慮した指導を明らかにし、幼小連携のカリキュラム作りに関する基本的な考え方をまとめることができた。

(2) 発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム試案

基本的な考え方に基づいて、幼稚園年長児後半から小学校一年生一学期のカリキュラムの留意点、交流活動における留意点を明らかにし、発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム試案を作成することができた。

(3) 試案に基づく実践例

試案に基づいて、幼稚園における協同的な学び、生活科を核とした他教科や領域を連携させた合科総合的な活動、幼小交流活動における子どもの学びの姿、育てたい力、指導や環境構成の工夫を明らかにすることができた。

(4) 幼小連携のカリキュラム作りに関する研究のまとめ

「発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム」の作成をもって、研究のまとめとするが、今後、実践と活用をとおしてさらに改善を図っていきたいと考える。

2 今後の課題

「発達段階に応じた子どもの学びを軸とした幼小連携のカリキュラム」の内容について、各幼稚園と各小学校の実状や幼児児童の実態に応じた実践をとおして、より一層内容を充実させていく必要があるものとする。

おわりに

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました研究協力園、協力校、協力員の先生方、幼児児童の皆さんに心からお礼を申し上げます。

【引用文献】

白川蓉子（2001）、「幼児期から児童期の教育」、『初等教育資料』3月号，東洋館出版社，p. 109

【参考文献】

秋田喜代美監修（2002）、『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例』，小学館

秋田喜代美（2006）、「接続期の遊びと学び」、『幼稚園じほう』第33巻第10号，全国国公立幼稚園長会

岡山大学教育学部附属小学校かけはし学習研究会（2006）、『学校が大好きな1年生をめざして』，東洋館出版社

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校（2006）、『子どもの学びをつなぐ』，東洋館出版社

国立教育政策研究所教育課程研究センター，『幼児期から児童期への教育』，ひかりのくに

佐々木宏子（2004）、『なめらかな幼小の連携教育』，チャイルド本社

全米乳幼児教育協会編，白川蓉子・小田豊日本語版監修（2000）、『乳幼児の発達にふさわしい教育実践』，東洋館出版社

福士幸雄（2005）、「幼小連携の進め方に関する研究－幼児児童の感性をはぐくむ音楽的な活動をとおして－」、『平成16年度岩手県立総合教育センター研究発表会資料』，岩手県立総合教育センター